言語研究（*Gengo Kenkyu*）**158**: 91–116（2020） doi: 10.11435/gengo.158.0_91

受身・可能とその周辺構文による ヴォイス体系の対照言語学的考察
――古代日本語と現代スペイン語――

志　波　彩　子
名古屋大学

【要旨】古代日本語のラレル構文体系と現代スペイン語の再帰接辞 se による中動態の体系は，外的動作主を介さない自然発生的変化の構文から外的動作主を必ず介する動詞にまで構文を拡張し，受身や可能を表す構文を持つ点では共通する。一方で，日本語のラレル構文は有情者に視点を置いた有情主語の受身を中心的に持つのに対し，スペイン語は中立視点で，事態実現の局面を捉える非情主語受身を中心に発達させている。その事態実現の非情主語受身の領域に，日本語は実現構文（自発・可能）を発達させている。また，日本語の可能は個別一回的な実現系状況可能であるのに対し，スペイン語の se 中動態における可能は，潜在系の対象可能ないし場所・時間可能である。さらに，スペイン語の中動態も与格代名詞と組み合わさって「動作主に意志がないのに行為が発生する」という日本語の自発によく似た意味を表すが，中心的に用いられる動詞には両言語で違いがある *。

キーワード：自然発生的変化，中動態，再帰，非人称，受身・可能・自発

1. はじめに

本研究は，古代日本語（特に中古日本語 Early Middle Japanese）と現代スペイン語（以下スペイン語と略す）のヴォイス体系の比較対照を通して，両言語の体系における各構文の対応関係を明らかにするとともに，両言語のヴォイスの共通点と相違点を指摘し，言語におけるヴォイス体系の拡がりを考察することを目的とする。

日本語の受身・可能を表す接辞 -(r)are-（上代は -(r)aye-, 以下ラレルと表記）は,「自ずから然る」ことを意味する自然発生的変化を表す自動詞（以下, 自然発生的自動詞）の派生語尾の類推から文法的接辞として取り出されたとされる説が現在最も有力である（橋本 1931，釘貫 1991，川村 2012 等）。一方のスペイン語の再帰接辞 se による中動態の体系でも，自然発生的変化を表す構文から受身構文が派生したことが知られている（Monge 2002，寺﨑 2011 等）。また，se による中動態の中にも，可能

* 本研究は科研費 16K02726 の助成を受けている。執筆にあたり，2 名の査読者の方から大変丁寧で貴重なコメントを頂戴した。また，東京外国語大学名誉教授の高垣敏博先生にも多くのご教示を賜った。ここに記してお礼申し上げる。ただし，本稿の誤解や不備の責任はすべて執筆者の志波に帰するものである。

の意味を表す構文が見られる。このように，両言語は同じように自然発生的変化を表す構文から受身や可能を発達させている，という共通点がある。では，この内実はどのようなものであるのか，この点について両言語の下位構文タイプを対照し，共通点と相違点を明らかにしたい。

なお，現代日本語のヴォイス体系は，近代における欧文翻訳の影響を受け，古代日本語とはその様相が大きく異なっている。このため，西欧諸言語の中動態を中心としたヴォイス体系との本質的違いが見えにくくなっている。そこで，本研究では接辞 -(r)are- が発生した当初の古代日本語を対象とし，現代日本語のヴォイス体系がなぜこのような体系なのかという問いも念頭に置きつつ，両言語の体系を比較する。

以下，第 2 節では先行研究を概観し，第 3 節では受身と可能の分類（下位構文）を確認し，本稿における「視点」の概念について，及び自然発生的自動詞と受身・可能の関係を論じる。次ぐ，第 4 節では古代日本語のラレル構文の下位構文タイプについて述べ，第 5 節ではスペイン語の se 中動態の下位構文タイプを見る。最後に第 6 節で両言語の受身，可能，自発構文を比較し，さらに両言語のラレル構文と se 中動態の体系を対照する。

2. 受身，可能を含んだヴォイス体系をめぐる先行研究

通言語的に受身を超えたヴォイスの特徴を議論する研究は古くからあるが（Velten 1931，Barber 1975 等），特に受身への関心が高く，通言語的な受身の特徴を議論するものが多い（Keenan 1985，Shibatani 1985，Croft 1994 等）。類型論的な視点は個別の言語を観察する上でも欠かせないものだが，大局的な議論に陥りがちである。その例として Shibatani（1985）の議論を以下で紹介する。

2.1. Shibatani（1985）

Shibatani（1985）は受身（passive）の本質的性質は何かを考察するにあたり，受身形式が通言語的に自発（spontaneous）や可能（potential），再帰（reflexive），相互（reciprocal）といった意味をも表すことを示し，典型的な受身形式の性質を「動作主背景化（agent defocusing）という語用論的機能であると提唱した。Shibatani の，通言語的に「受身」と呼ばれる現象とその形式が表す多様な意味に通底する共通性を追求する姿勢は，英語の受身を中心に観察し，そこから得られた一般化を受身の一般的性質とするそれ以前の研究に対して先駆的であった。しかしながら，そこに挙げられている例文を見ると，それらが果たして同じ自発や可能と見なせる意味を表すのか，疑わしいものも少なくない。自発については，Shibatani に限らず，例（1）に挙げたような 2 つの異なる文が，多くの先行研究で同列に扱われていることは川村（2012）でも指摘されている。

（1）　a.　その写真を見ると，学校生活が懐かしく<u>思い出される</u>。【自発】

b.　風が強くて，桜の枝が折れた。【自然発生】

(2)　Se　abrió　la puerta.　(Shibatani 1985: 827，出口 1982: 307)
se　open.3SG.PAST　the door
'The door opened.'

(1) a のラレル構文が表す自発は，動作主（典型的に話し手）に視点があり，動作主の側から「自分に意志がないのに自分の行為が自然に発生する」という意味を表している。これに対し，(1)b の自動詞文は，「動作主の介在なしに変化が実現する」という意味を表している。そして，Shibatani が出口（1982）から引用している（2）のスペイン語の文は，（1）b 同様，自然発生的変化（ないし受身）を表している。日本語のラレルは，自然発生的自動詞文の語尾の類推から文法的接辞として取り出された（再分析された）ことは間違いないと考えられるが，ラレル構文そのものが自然発生の自動詞としての用法を持つわけではない。

同様に，可能構文についても，次のような例文が同じように「可能」であるとして挙げられている。

(3)　僕は眠られなかった。　(Shibatani 1985: 823，日本語表記に変換)

(4)　¿Se　va　por　aquí　a　la　estación?
(Shibatani 1985: 828, 出口 1982: 314)
se　go.3SG.PRES　via　here　to　the　station
'Can one go to the station from here?'

だが，（4）の文が可能の意味を持つとしても，それは非常に限られた語用論的条件においてであり，日本語のラレル文が表す様々な可能の意味とは別種のものと感じられる。

本研究は，言語類型論の中でこのように大局的な視座から扱われてきた受身とその周辺の構文について，古代日本語とスペイン語を対照することで，ヴォイス体系とそれぞれの構文のどのような点が共通し，どのような点が異なっているのか，その内実をより詳細に，正確に明らかにすることを目指す。

2.2. 日本語のラレル文

日本語のラレル文については，古くから研究の蓄積が多く現在でも盛んに議論されているが，ここでは近年の研究として重要な位置を占め，また本研究の議論に最も関係が深いと思われる尾上圭介と川村大の一連の研究を主に取り上げる。

古代日本語のラレル文と受身文については，川村（2012）に研究史も含めて体系的な記述があり，本研究の議論も川村の学恩に浴している。川村の議論は，尾上（1998ab，1999，2002，2003）の出来文の議論にのっとってラレル形述語文の多義や格体制の様々を説明している。この出来文説は，自発派生説や受身派生説などいずれかの用法から他の用法が派生したと考える従来の説に対し，ラレル文は「出来」

というスキーマで述べる文であると捉え直し，ラレル文の各用法と意味のあり方について徹底的に考察を深めた優れた研究である。だが，出来文説には多くの不自然な説明があり，そのいくつかについて志波（2018a）で述べたが，ここでも簡単に重要な問題点を指摘する。

出来文とは，通常の動詞述語文が事態を個体の運動として捉えるのに対し，「事態をあえて個体の運動（動作や変化）として語らず，場における事態全体の出来，生起として語るという事態認識の仕方を表す文である」（尾上 2003: 36）とされる。一方で，尾上は自然発生的自動詞についてはこれを出来文ではないとし，両者の関係についても語らない。川村は，出来文と自然発生的自動詞文が「ヒトの身の上に生じる変化」であるか否かで大きく異なり，自然発生的自動詞文はやはり出来文ではないとする（川村 2012）。だが，両氏が「発生状況描写」とする「桜が花瓶に活けられているのを」のような文は，ヒトの身の上に生じる事態ではない上，自然発生的自動詞文と意味や構造が似ている（橋本 1931[1]）。また，ラレルが自然発生的自動詞の語尾の類推から取り出されたとする説を取るなら，当然「自然発生」という自動詞の語性を継承しているはずだが，この関係について深く語らない。このように出来文説では，自然発生的自動詞構文との関係が合理的に説明できない。第二点目として，出来文は「ゴミが捨てられている」（状況）は表せるが，「ゴミが捨てられた」（実現局面）は表せないとする。しかし，「事態全体の生起」という捉え方がなぜ「状況」でなければならないのか，なぜ実現局面であってはならないのか，という理論的説明ができない。第三点目として，尾上（2002）では，有情者が主語の通常の受身と，古代語に存在した，本研究で状態受身と呼ぶ受身（「発生状況描写」）について，「非動作主視点事態描写」とし，この用法にのみ「視点」という概念を持ち込む。しかし，なぜこの用法にのみ「視点」という概念が必要なのか，及び他の出来文の意味との関係については全く議論されていない。

これに対し，本研究では，「自然発生」の意味と「視点」のあり方との相互作用により，ラレル構文が表す意味（本稿では自発・可能と受身のみを扱う）を無理なく説明できることを示す（4 節参照）。

2.3. スペイン語学（ロマンス諸語）の中動態（再帰構文）

中動態（middle voice）とは，元来古典ギリシャ語や古典ラテン語にあったような動詞の屈折による体系[2]をさす用語であったが，Kemmer（1993）により，Kemmer

[1] 実際，橋本（1931）は自動詞構文の表す「自然発生」と非情主語受身構文の表す意味に非常な共通点を見出している。橋本は，古代日本語に存在した，本研究で状態受身構文と呼ぶ「御ぐしのすこしへがれたる」や「さいでのおしへされて」などの非情主語の受身は，自然にそうなったという自動詞相当の意味を表していると述べ，これらの他動詞に対応する自動詞がないためにラレルをつけて自動詞的に表したのだとする。そして，有情主語の受身は，この非情主語の受身から派生した（推移した）と推測している（橋本 1931[1969: 281–283]）。

[2] 古典ラテン語では，すでに中動態は失われ，中動態由来の語尾 -r が受動態として機能していたが，中動態の意味にも拡張していたようである（Jiménez Juliá 2015）。

が中動状況タイプ（middle situation type）と呼ぶ状況タイプ（5.2 参照）に同一の標識が用いられる場合，その言語は中動態を持つということが提案された。本研究でも Kemmer の提案に賛同し，中動態は現存する多くの言語のヴォイス体系の中核にある重要なカテゴリーであるとみなす。

Kemmer（1993）は中動態が表す様々な意味を，「relative elaboration of events（相対的な事態の精緻化）」という概念を用い，説明している。つまり，中動態とは通常の他動詞構文に比べ，事態の精緻化（綿密な加工）の程度が低いが，自動詞文に比べれば精緻化の程度が高いということである。一方，中動態の古典的研究である Banveniste（1966）では，「能動態においては，動詞は，主辞に発して主辞の外で行われる過程を示す。これとの対立によって定義されるべき態であるところの中動態では，動詞は，主辞がその過程の座であるような過程を示し，主辞の表すその主体は，この過程の内部にある」と定義されている（Banveniste 1966[1983: 169]）。中動態とは何か，その特徴を把握する上では，Banveniste の中核的な定義が重要であるが，中動態マーカーが表す広範囲の現象のすべてを「中動態」として理解する上では，Kemmer のより抽象的な定義も有用であると考える。

さて，中動態の下位構文の様々については，スペイン語学に限らず，ロマンス諸語，ドイツ語，ギリシャ語など，近年も活発に議論されているが（Mendikoetxea 1999，Frajzyngier & Curl 2000，春木 2002，Sánchez López 2002，Allan 2003，大矢 2008，藤田 2010，Fernández-Montraveta & Vázquez 2017 等），スペイン語学の中でも言語学的，さらに教育学的な観点から，分類がなされてきた（Gili Gaya 1961，Alarcos Llorach 1968，RAE-ASALE 2009 等）。さらに，近年の研究では再帰構文の通時的な発達・拡張の観点も取り入れられ，その下位構文が整理されてきている（Sánchez López 2002）。本研究でも Sánchez López（2002）及び Kemmer（1993）に従い，こうした通時的な発達の観点と下位構文の意味・機能の違いにより，大きく下位構文タイプを分類し，日本語のラレル構文の体系と対照することにする。

なお，スペイン語には se 中動態以外に，「コピュラ＋過去分詞」という形式による受身文も存在するが，本稿ではこのタイプの迂言的受身構文については扱わない（注 11 も参照）。

3. 自然発生的変化と受身・可能の下位構文タイプ

3.1. 受身の下位構文タイプ

両言語の受身構文を対照するにあたり，一般に「受身」と呼ばれる構文にどのような下位タイプがあるかを確認しておく。

本研究では，志波（2005）に従い，受身をその主語の有情非情の別によって有情主語受身と非情主語受身に大きく分ける。そして有情主語受身を行為者の有情性によって有情有情受身と有情非情受身に分け，有情有情受身をいわゆる直接受身と間接受身に分ける。

ここで重要なことは，以下で見るように，古代日本語の中心的な受身は有情主語

受身であったということである。有情主語受身は，有情者（最も典型的には話し手）が主語に立ち，この主語の有情者の側から「自分が他者から行為・影響を受けた」という意味を表す（よって受影受身とも呼ぶ）。こうした受身を中心的に発達させたからこそ，近世において事態に関与するあらゆる参与者を主語に立てる間接受身を発達させたのだと考えられる[3]（川村 2012，山口 2018）。

- 受身構文
  - 有情主語受身（受影受身）
    - 有情行為者
      - 直接受身「私は太郎に責められた」
      - 間接受身「私は太郎に先に行かれた」
    - 有情非情受身「私は育児に追われている」
  - 非情主語受身（自動詞的受身）
    - 有情行為者
      - 事態実現受身「机が外に運び出された」
      - 状態受身「階段に絵が飾られていた」
    - 非情非情受身「葉が陽に照らされて光っている」

図 1　受身構文の分類（志波 2005，2015 を改変）

これに対し，非情主語受身は，動作主を背景化して事態生起に焦点を当て，自動詞的に述べる機能を本質的特徴とする。この非情主語受身は，通常動作主は文脈からは特定できないが，自動詞（自然発生）と異なり，必ず何らかの外的動作主が変化（事態実現）に関与したことが含意される。本研究では非情主語の受身を，さらに事態（変化）の実現の局面を捉える事態実現受身と，主語である対象の結果状態を捉える状態受身に分け，主語も行為者も非情物である受身を非情非情受身とする。

このように受身を分類すると，近世以前の日本語には，動作主を背景化し，事態が実現したそのことを前景化して述べる非情主語の事態実現受身が存在しなかったことが分かる（金水 1991，川村 2012，岡部 2018）。これは，古代日本語がこの事態実現受身の領域に動作主の視点から述べる自発・可能構文を発達させたためである（志波 2018b）。一方，中立視点のまま自然発生的変化構文からこの事態実現受身を発達させたのがスペイン語の se 中動態の発達方向であるということを議論していく。

3.2. 可能の下位構文タイプ

通言語的に可能の意味は，テンス・アスペクト，ヴォイス，モダリティといった広範囲の文法現象と関わっていることが知られるが（山口 2010），スペイン語でも英語同様，通常の能力可能や状況可能は法助動詞的な poder（can）と saber（know）によって表される。

[3] 間接受身文の類型は中世以前にはかなり限られており，「太郎に先に行かれた」のような自動詞の受身や主語が完全に第三者である「友達に変な歌を覚えられて恥ずかしかった」などは存在しなかった。中世以前の間接受身のほとんどは，所有者が主語に立つ持ち主の受身である（川村 2012，山口 2018）。

日本語学では，奥田（1986）を受けて渋谷（1993）が提案した潜在系と実現系の区別，及び，事態実現の許容性・条件がどこにあるかによる分類が広く知られている。潜在系とは，時間軸に位置づけられずに，時間を超えて行為が実現する許容性があることを述べる可能であり（(5)），実現系とは，個別具体的な出来事として時間軸に位置づけられる可能で（(6)），事態が動作主の意図・期待通り実現することを表す。

(5)　a.　良美は朝早く起きられない。
　　b.　この魚は生で食べられる。
(6)　a.　（私は）会議場前にようやく車が止められた。
　　b.　やっと学生の名前が覚えられた。

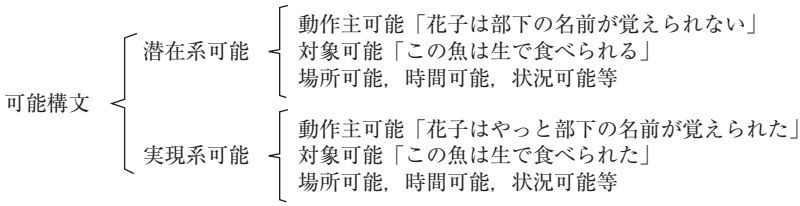

図 2　可能構文の分類

また，事態実現の許容性・条件がどこにあるかという観点からは，例えば（5a）のように動作主の性質や能力が許容性・条件となるものは動作主可能（能力可能），（5b）のように動作対象の特性が実現の許容性・条件になっているものは対象可能と呼ばれる。実際の使用では，「私にはこの論文は難しくて読めない」のように，動作主の能力と対象の特性の両方が事態実現の条件になっている場合も多いが，典型的にはこのように分けておくことができる。さらに，実現の許容性が場所（「この川は泳げない」）や時間（「夏には早く起きられる」）にある場合など，場所可能，時間可能等と呼ばれる。

ところで，実現系可能とは，現実界で実現した出来事を述べるのであり，厳密な意味では「可能」ではない。このため，尾上（1998b）は（6）のような実現した事態を表す文を「可能」とは呼ばないわけだが，一方で，実現系可能は否定（と未来時制）のときには実現していない事態を表すため，潜在系に近づいていく。個別具体的な事態として述べても，「動作主が意図を持ってやろうとしてもその行為が実現しない許容性，萌芽が状況の中にある」（尾上 1998b の定義を改変）という「可能」の意味を表すことになる（「あの人が恋しくて寝られない」等）。古代日本語の可能はほとんどが個別具体的な実現系であるが，否定に使用が偏っているため，本研究ではこれを「可能」と呼んで考察していく。

3.3.「視点」（view point）について

ここで，本研究で主張する「視点」の概念について確認したい。近年，様々な文法現象について，様々な立場から，それぞれ異なる意味で「視点」という用語が用いられてきた。古賀（2018）では，こうした様々な「視点」の概念が網羅的に扱われ，日本語の文法説明にどのような意味で「視点」という語が用いられてきたかが整理されている。本研究で主張する「視点」という概念は，古賀の言い方で言えば，「〈視座：話し手が当該の事象を誰（動作主／被動作主）の立場カラ見ているか〉」（古賀 2018: 122）という意味である。よって，この意味での「視点」は，非情物に置くことはできない。先の有情主語の受身文は，テキスト構造の中で動作主ではなく動作を受けた人物の側カラ述べる，という機能を果たしている（古賀 2018: 122）。古代日本語にはやりもらい表現がない（荻野 2007 等）ことから，現代日本語にあるような「私＜親族＜友人＜知人等」といった共感の階層は存在しないと考えられるが，「有情者＜非情物」という視点の序列はあっただろう（金水 1991 等）。

一方，非情主語受身である事態実現受身や状態受身では，視点は「中立的」であると述べる。視点が中立的とは，事態参与者の誰にも視点を寄せずに，いわば舞台を下から眺めるように，出来事から一定の距離を置いて事態を述べることを意味する。

3.4. 自然発生的自動詞と受身・可能の並行性

自然発生（spontaneous）とは，先にも述べたように，外的動作主の働きかけなしに，主語に立つ対象の特性と何らかの外的要因によって変化が実現する，ということである。この自然発生を表す自動詞構文は，中立視点で主語に立つ対象の特性と何らかの外的要因によって変化が実現することを表す場合（(7)）と，当該事態の実現を期待する動作主を含意させ，その動作主の側から変化の実現を語る場合（(8)）がある（志波 2018a）。

(7)　a.　机の上の書類が（振動で）崩れた。
　　b.　熱でスプーンが曲がった。
(8)　a.　瓦礫の山がやっと崩れた。
　　b.　スプーンが何とか曲がった。

上の（7）のような，中立視点で自然発生を述べる構文が，中立視点のまま，本来外的動作主を介さずには起こり得ない事態にまで拡張したのが，次の（9）のような非情主語の受身構文（事態実現受身）である。これに対し，（8）のように当該事態の実現を期待する動作主の側から自然発生を述べる構文を拡張させると，（10）のような可能構文になる。

(9)　a.　会議場前に数台の車が止められた。
　　b.　海にたくさんのゴミが捨てられた。

（10）　a.（私は）会議場前に（ようやく）車が止められた。＝（6）a
　　b.（捨てられるかどうか不安だったが）結構たくさんのゴミが捨てられた。

このように，自然発生的自動詞構文が表す2つの意味に並行する形で，非情主語受身構文（事態実現受身）と可能構文があることが分かる。以下では，古代日本語は自然発生的自動詞構文から動作主視点で可能や自発を発達させたのに対し，スペイン語では中立視点で非情主語受身構文(事態実現受身)を確立していることを見る。

4. 古代日本語のラレル構文の体系

本節では，古代日本語に存在したラレル構文の下位構文タイプがどのようなものであったかを見る。志波（2018b）では，ラレル構文が有情者に視点を置いて，**有情者の側から「自分に対して事態が自然発生する」ということを述べる構文**であったとした。このとき，有情者に対して自らの行為が自然発生する／しないことを述べるのが自発・可能構文である。本研究では，この自発・可能構文をまとめて「実現構文」と呼ぶ。また，有情者に対して他者による行為が自然発生する（降りかかってくる）のが受身である。これに対し，「主催」と呼ばれる構文は，視点が中立的である。主催とは，従来尊敬用法と分類されていた中に，行為の主体が漠然として不特定であり，かつ主体が当該行為を間接的に行うという意味を表す特殊な文[4]があるとして，吉田（2019）で提案された用法である。そして，後発の用法とされる「尊敬」は，吉田の仮説に従えば，この主催から派生したものと考えられる。ただし，本稿では主催構文と尊敬構文については詳しくは取り上げない。また，非情主語の受身である非情非情受身と状態受身についても，志波（2018b）で詳しく述べたので本稿では取り上げない（以下，古代日本語の用例のラレル述語に下線，対象に枠囲い，行為者に編みかけ，外的要因に波下線を施し，筆者断り書きを【】で示す）。

い）実現構文　　い－1自発構文「【ひどく真っ赤な薄様の手紙を真っ赤な唐撫子に結びつけたのを】取り入れたるこそ、書きつらむほどの暑さ、心ざしのほど 浅からずおしはかられて、かつ使ひつるだにあかずおぼゆる 扇 もうち置かれぬれ」　（枕草子）
　　い－2不可能構文「恋しからむことの堪へがたく 湯水 飲まれず」　（竹取）

[4] 尾上（2002）では非人称催行用法とされている。多くが公的な行事について用いられるのを特徴とし，主に変体漢文のジャンルで用いられる。この構文は，「動作主を背景化し，中立的視点で当該事態の実現を前景化する」という機能では事態実現受身に酷似しているが，対象を主格表示した確例がないため，尊敬用法とされてきた。テキストの視点構造が外在的である変体漢文でこの用法が多く用いられたことは,「視点」をラレル構文が表す意味の重要なファクターと考える本研究にとって示唆的である。

ろ）受身構文　　ろ－1 有情主語受身構文「人にもてかしづかれて」（源氏・帚木）
　　ろ－2 非情非情受身構文「岩にせかるゝ 滝川 の」（詞花和歌集）
　　ろ－3 状態受身構文 「 髪 の美しげにそがれたる末も」
　　（源氏・若紫）
は）主催構文 「 仁王会 など行はる」　（源氏・明石）
に）尊敬構文 「人々近うさぶらはれよかし」　（源氏・若紫）

以下，実現構文と受身構文について，用例を挙げながらその構造的特徴と意味の現れ方を確認する。

4.1. い）実現構文（Realization Construction）

実現構文は，個別特定の有情者に話し手の視点が置かれ，この有情者＝動作主の側から「動作主に対して，（何らかの要因によって）自分の行為が自然発生する／しない」ことを述べる。実現構文では，視点の置かれる有情者が格表示されることはない。対象が現れる場合，「は，も，こそ」などで取り立てられていることが多いが，格表示は，ゼロ，ノ格，ガ格，ヲ格が確認されている（川村 2012: 172）。実現構文の形式は，次のようなものであると想定される。

(11)　い）実現構文の構文形式
［有情者（動作主）主題（大主語）（事柄（要因）修飾句）（非情物（対象）[5]- φ / 主格 / 対格小主語／補語）行為動詞 -(r)are］
「【相手の好意の深さが推し量られて】 扇 もうち置かれぬれ」　（枕草子）
「使はるる人も，【中略】恋しからむことの堪へがたく 湯水 飲まれず」　（竹取）

動作主が個別特定の有情者であることと連動して，この構文は基本的に，テンス・アスペクト的に個別具体的な，時間軸上の一回的な事態を表す。つまり，個別の動作主を取り巻く一時的な状況によって，当該行為が自分に対して実現する／しないことを表す[6]。

本研究では従来「自発」と「可能」と呼ばれてきたラレル構文の用法を「実現構文」として1つにまとめた[7]。自発構文は用法が肯定に偏り，不可能構文は，「不可能」と名付けたように，典型的に否定である。つまり，実現構文は肯定では「自発（非

[5] 対象は有情者である場合もあるが，典型的には非情物であると考える（柴谷 2000: 160）。
[6] ただし，先に述べたように，実現系可能は否定のときに当該事態実現の許容性がないと述べることになり，これは特に連体修飾などの環境では時間を超えた一般的性質や状況と読み取りやすくなる。川村（2012: 192）ではこうした潜在系の不可能はわずかだが存在したとされる。
[7] 渋谷（1993）は，この2つの用法を両方とも「自発」であるとする。確かに両構文はいずれも動作主にその意志がないという点で共通している。しかし，吉田（2013）が述べるように，「自発」と「可能」は，事態実現への意図・期待があるか否かという点で異なる。当該事態の実現の意図・期待がないのが「自発」であり，意図・期待があると「可能」の意味が読み取られる。

意志)」，否定では「不可能」を中心的に表している[8]。

4.1.1. いー 1 自発構文（非意志）（Non-volitional construction）

自発構文は，現代日本語では思考動詞と一部の感情動詞に用法が限られており，ラレル構文の中では生産性を失っているが，古代日本語では心理動詞に用例が偏っているものの動作動詞や自動詞でもこれを構成し，ラレル構文の中心的構文であった（6.2 の表 1 も参照）。（12）は心理他動詞の例，（13）は動作動詞の例（4 節冒頭のい -1「置かれぬ」の例も）として挙げた。いずれも，「動作主である有情者に対して自分の行為が自然発生する」ことを述べている。

（12）　上臈どもみな参う上りて、我も我もと装束き化粧じたるを見るにつけても、かのゐ並み屈じたりつる気色ども ぞあはれに思ひ出でられたまふ。
（源氏・葵）
（上臈の女房たちがみな参上して、我劣らじと着飾り、身づくろいしているのを見るにつけても、左大臣邸であの居並んで沈みきっていた皆の様子を悲しく思い出さずにはいらっしゃれない。）

（13）　「【前略，女性の，漢字の多い消息は】心地にはさしも思はざらめど，おのづからこはごはしき声に読みなされなどしつつ，ことさらびたり。【後略】」
（源氏・帚木，川村 2012: 170）
（本人としてはさほどにも思っていないのでしょうが，こちらではしぜんにごつごつした声で読ませられることになって，わざとらしい感じになります。）

4.1.2. いー 2 不可能構文（Impossible construction）

不可能構文は，動作主である有情者の側から「通常なら実現することが，何らかの要因によって自分に対して自然に発生しない（実現しない）」ことを述べる。

（14）　… 召し入れて、のたまひ出でんことのあへなきに、ふと もの も言はれたまはず。
（源氏・夕顔）
（すぐお呼び入れになって、さてこの顚末をおっしゃろうにも、それがあまりにもあっけないことになってしまったので、急には何もおっしゃれない。）

（15）　御胸つとふたがりて、つゆまどろまれず，明かしかねさせたまふ。
（源氏・桐壺）
（帝は胸がいっぱいにふさがって、とろりともお寝みになれず、夏の短夜を明かしかねておいでになる。）

---

[8] もちろん，川村（2012）でも詳細に記述されているように，自発の否定，肯定の可能の使用はあり，まったく存在しなかったわけではない。しかしながら，肯定と否定の使用の偏りは大きく，古代日本語におけるラレル構文の体系における中心的構文を把握する上では，動作主視点の実現構文は，肯定では自発（非意志），否定では不可能を中心的に表したと捉えて差し支えないと考える。

いずれも一時的な状況が要因となって実現しないことを表しており，時間軸に個別具体的な出来事として位置づけられるものであるが，否定であることにより状態性＝不可能な状況が読み取られる。なお，古代語には（6）のような，「主語＝動作主が意図した行為が意図通り実現する」という意味の肯定可能は未だ存在しなかった（吉田 2013）。

4.2. ろ）受身構文（Passive construction）

古代日本語の受身構文には，先に分類した受身構文（3.1，図 1）のうち，有情者に視点がある有情主語受身構文（ろ－ 1），主語も行為者も非情物である非情非情受身構文（ろ－ 2），対象の結果状態を捉える状態受身構文（ろ－ 3）がある。この他に，岡部（2018）や川村（2012）によれば，「擬人法」の非情主語受身が存在するが，これは有情主語の受身に準ずるものであり，構文タイプとしては立てない。そして，従来の研究で「潜在的受影者のいる受身文」とされてきた非情主語受身（岡部 2018，川村 2012）を，有情主語受身構文の下位タイプと位置付け，実現構文と並行して次のような形式を持っていたと考える。

（16）　ろ）有情主語受身構文の構文形式
［有情者（対象／所有者）主題（大主語）（有情者（動作主）- ニ修飾句）（非情物（対象）- φ / 主格 / 対格小主語／補語）行為動詞 -(r)are］
「重雅は $\boxed{\text{色}}$ ゆるされにけり」　（枕草子）

例えば，次のような非情物の対象が現れる受身文は，持ち主の受身（手斧を取られる）と見なすなら有情主語の受身，非情物対象が主格相当である（手斧が取られる）なら潜在的受影者のいる非情主語受身と考えられてきたが，これをいずれも視点が有情者にある有情主語の受身と見なす，ということである[9]。

（17）　み幣取り三輪の祝が斎ふ杉原 薪伐りほとほとしくに $\boxed{\text{手斧}}$ 取らえぬ
（万葉 1403）
（幣を手に取り三輪の神職が大事にしている杉原。薪採りはすんでのことで手斧を取られるところであった）

古代日本語の有情主語受身では，個別特定の動作主がニ格に現れることはまれで，多くが（18）のように「人に，世に」などの不特定一般の人を示す名詞句である（文脈上特定の人を指しているとしても）。このことは，受身構文のニ格が未だ動作主

[9] ただし，中古には次のように視点のある所有者である有情者が主格表示される非情物の修飾語として属格で現れる例があり，この点では実現構文の構造形式と異なっている（上代にはこうした例は見られない）。今後の課題である。
・【前略】この君さへかくおはし添ひぬれば，春宮の御祖父にて，つひに世の中を知りたまふべき，$\boxed{\text{右大臣の御勢}}$ は，ものにもあらずおされたまへり。　（源氏・桐壺）

というよりも原因（要因）的であり，実現構文との境界が曖昧であったことを示唆する。

（18）「【前略】いかになりたまひにきとか人にも言ひはべらん。悲しきことをばさるものにて，人に言ひ騒がれはべらんがいみじきこと」　（源氏・夕顔）
（また，どうおなりになったと人に申せましょう。悲しいことはそれとしましても，人に何やかや言い立てられるのがつらくて。）

（19）【六条御息所】かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ尽きぬべきこと，なかなか もの思ひ のおどろかさるる心地したまふに，御文ばかりぞ暮つ方ある。　（源氏・葵，川村 2012: 152）
（…自分がこうしてずっと君のお越しをお待ち申しているというのも，ただ心の尽きる苦しみを味わわされることになるのだろう，こうして，なまじ君にお逢いしたばかりに，かえって物思いの呼び覚まされるお気持でいらっしゃるところに，君のお手紙だけが，暮れ方に届く。）

この有情主語受身構文（ろ－1）に対し，非情非情受身構文（ろ－2）と状態受身構文（ろ－3）は中立的視点の自然発生的自動詞構文に準ずる構文として存在したと考えられる（注1の橋本1931の議論及び志波2018b参照）。

5. スペイン語の se 中動態の体系

スペイン語の se はもともと再帰代名詞であったが，用法（構文）が拡張して中動態（middle voice）の領域をも表すようになった。そして，古代日本語と同じように自然発生的変化の構文から受身や可能の意味を持つ構文を派生させている。

以下，スペイン語の se による中動態の下位構文を派生したと考えられる順に並べる（Monge 2002，Haspelmath 2003，林田 2013 等）。この順序は主語の自己制御性が低くなる順序でもある（ただし非人称構文には文法項としての主語がない）。

A）再帰構文　José **se mira** (a sí mismo) en el espejo.　ホセは自分（自身）を鏡で見る
B）中動状況構文　José **se despertó**.　ホセは目覚めた
C）非対格構文（自然発生的変化構文）El vaso **se rompió**.　コップが割れた
D）中間受身構文　Este libro **se vende** bien.　この本はよく売れる
E）事態実現受身構文　**Se firmó** el tratado en 2010.　2010 年に条約が署名された
F）非人称構文　Siempre **se nace** con poco pelo. 人は常にわずかな髪の毛で生まれる

これら6つの下位構文のうち，A）と B）は有情者が主語に立つ構文であり，C）～ E）は非情物（またはそれに準ずる）が主語に立つ構文である。スペイン語では，この，非情物が主語に立つ C）非対格構文から F）非人称構文にまたがって，可能の意味を帯びる構文が存在する。以下，それぞれの特徴を概観するが，説明の便宜上，D）中間受身構文を最後に見る。

5.1. A）再帰構文[10]（Reflexive construction）

再帰構文は，本来主語とは別の実体である対象に働きかけることを示す他動詞がこれを構成し，その対象がたまたま主語自身であることを表す。この構文は有情者が主語に立つことと連動して，se が人称・数で変化する。

（20）　構文形式［有情者（動作主）主語　se　意志他動詞　(a sí mismo)］se の人称数変化あり

（21）　a.　Juan ama　　a　　María.
　　love.3SG.PRES　ACC
　　「フアンはマリアを愛する」

　　b.　Juan **se　ama**　　(a sí mismo).
　　se　love.3SG.PRES　(ACC self same)
　　「フアンは自分（自身）を愛している」

この再帰構文に用いられる動詞はすべて他動詞であり，（21b）は他動詞に se がついたものであるが，スペイン語ではこの文が「フアンは愛されている」という受身の意味を表すことはない。よって，スペイン語の se 中動態では有情者が主語に立つ受身構文は存在しない[11]。

5.2. B）中動状況構文（Middle situation construction）

中動状況構文は，「主語が自らの意志で行為を発し，その行為が主語の領域で展開して完結する」という意味を表し，本来的に主語自身が行為の中心として展開する事態を示す動詞がこれを構成する。本研究では，Kemmer（1993）が「中動態

---

[10] Haiman（1983）や大矢（2008）などでは，本稿で再帰構文としているものを「外向的再帰」，本稿で中動状況構文に含めている身づくろいや姿勢変化などを「内向的再帰」と呼んでいる。大矢（2008）は，日本語や英語などには外向的再帰はあるが，内向的再帰は存在しない（再帰マーカーが現れない）とする。本稿では，Kemmer（1993）の分類に従い，「中動状況構文」の中に，身づくろい等の「内向的再帰」を含め，Haiman や大矢の外向的再帰は単に「再帰」とした。一方，Sánchez López（2002）では，身づくろい等は再帰であるとして「中動構文」には含めず，感情変化と本来的再帰（Deponents），本稿の非対格構文を「中動構文（las construcciones medias）」としている。これに対し，Mendikoetxea（1999）は「中動態」の中に（およその対応であるが）本稿の再帰構文，中動状況構文，非対格構文を含めている。このようにスペイン語学内においてもどこまでを「中動（media）」とするかについて未だ統一見解はないが，本稿は「身づくろい」等，本来的に主語が自分に働きかける行為が中動態の中心であるという考えから，Kemmer の分類を採用した。

[11]「examinarse（試験を受ける），operarse（手術を受ける），emplearse（就職する（雇用される））」などごく限られた動詞で受身相当の意味を表すが（出口 1997: 146），こうした動詞も主語が一方的に「行為を身に受ける」ことを表すのではなく，主語に主体性が感じられる受身である。ただし，スペイン語には，se 中動態のほかに，［コピュラ動詞 ser ＋過去分詞］の組み合わせによる受身も存在し，この構文では有情者が主語に立つ。しかし，この［ser ＋過去分詞］構文も日常会話で用いられることはほとんどなく，よって，1 人称が主語に立つことがほぼない（志波 2014）。なお，Shibatani（1985: 826）では受身の例として「Se curó a los brujos.（The sorcerers were cured.）」という例が挙がっているが，これは，「los brujos（魔術師）」が対格表示「a」を伴っており，動詞はこの対象項に一致していないため，受身構文ではなく，非人称構文である。有情者が対象であるときは，再帰と区別するため，このように非人称構文で述べられる。

middle voice」と呼ぶ中動状況タイプのほとんどをここに含め，この中動状況構文を中動態の中心的領域と見なす。再帰構文が常に他動詞構文と対立しているのに対し，中動状況構文には自動詞（ir 行く→ irse 立ち去る等）も含まれ，基本文（能動態）との対立は様々であり，能動態を持たない動詞（deponents；portarse 振舞う，suicidarse 自殺する，arrepentirse 後悔する）も含まれる。

（22）　構文形式［有情者（動作主）主語　se　行為動詞（非情物（対象））］se の人称数変化あり

（23）　Ya　**me　bañé**.
already se.1SG　bathe.1SG.PAST
「（私は）もうお風呂に入った。」

（24）　身づくろい（Grooming）：bañarse 入浴する，afeitarse 髭をそる，peinarse 髪をとかす，pintarse 化粧する，ponerse 身につける，limpiarse los dientes 歯を磨く，等

（25）　姿勢変化（Change in body posture）：sentarse 座る，levantarse 立つ，等

（26）　本来的相互行為（Naturally reciprocal event）：pelearse 喧嘩する，encontrarse 会う，等

（27）　感情変化（Emotion middle）：enfadarse 怒る，irritarse いらだつ，alegrarse 喜ぶ，等

（28）　自然発生の「なる」[12]（Spontaneous events）：ponerse，volverse，hacerse，convertirse（以上，すべてある状態や属性に「なる」の意）

このほか，感情的発話行為（Emotive speech actions；quejarse 不平を言う），思考活動（Cognition middle；creerse 思い込む），移動運動（Translational motion；irse 立ち去る）など，Kemmer（1993）が挙げるほぼすべての中動状況タイプに se が用いられる（志波 2020 も参照）。

5.3. C）非対格構文[13]（自然発生的変化構文, Unaccusative (Spontaneous) construction）

非対格構文は，「主語が自らの特性と何らかの外的要因によって変化を実現し，その変化が主語の領域で展開して完結する」という意味を表す。この構文の要素となるのはすべて対象の変化を含意する他動詞であり，こうした他動詞を自動詞化する機能を果たしている[14]。主語は非情物で，動詞に前置も後置もする。

（29）　構文形式［非情物（対象）主語　se　変化他動詞 3 人称］se の人称変化なし

---

[12] この「ある状態になる」という意味の動詞では，人だけではなく非情物が主語に立つこともある。

[13] 非対格構文の名称は Sánchez López（2002）による。本稿では「自然発生的変化」という意味を重視しているので，これも併記した。

[14] スペイン語には語彙的な自動詞が非常に少なく，筆者が以前辞書を 5 ページおきに調べて主要な動詞を抜き出した限りの印象では，他動詞が 9 割で自動詞は 1 割程度である。このため，se 中動態を用いて非常に生産的に自動詞構文を作っている。

(30)　Las toallas **se secaron** (con el viento).
the towels se dry.3PL.PAST (with the wind)
「タオルが（風で）乾いた」

(31)　romperse 壊れる，derretirse 溶ける，doblarse 折れる，calentarse 温まる，teñirse 染まる，abrirse 開く，arrugarse しわになる，pegarse くっつく，等

5.4. D）事態実現受身構文[15]（Event-Realization passive construction）

事態実現受身構文とは，上の非対格構文から拡張した構文で，本来外的動作主を介さずには起こりえない，二参与者の事態までを，動作主を背景化し，「誰がするか」ではなく「何が起きるか（起きたか）」という事態の実現を前景化して，自然発生的に述べる受身構文である。こうした意味・機能的特徴と関連して，主語である対象が主題化されることは少なく，主語は動詞に後続するのが無標の語順である。つまり，他動詞構文の主語である動作主が構造上削除（suppress）されただけで，対象は本来の位置に留まっている構造形式であると言える。動作主性の低い組織等の動作主句を por（によって）で表すことを可能とする文献もあるが，実際の使用はほとんどない（Sánchez López 2002: 58–60）。**外的動作主を必ず必要とする事態**を表す他動詞がこの構文を構成する。

(32)　構文形式［se　他動詞 3 人称　非情物[対象]主語　(por 組織等[手段的動作主])］se の人称変化なし

(33)　**Se firmaron** los tratados ayer.
se sign.3PL.PAST the treaties yesterday
「昨日条約が調印された（サインされた）」

(34)　hablarse 話される，estudiarse 研究される，utilizarse 利用される，escribirse 書かれる，construirse 建築される，cocinarse 調理される，publicarse 出版される，等

(35)　**Se rompieron** las ventanas violentamente.　（cf. (30)）
se break.3PL.PAST the windows violently
「窓が乱暴に割られた（破られた）」

先の非対格構文は，自然発生的変化の解釈が優勢であるものの，動作主の意図を含意する副詞句等を伴えば，「romperse（割れる）」も受身解釈が可能である（(35)，RAE-ASALE 2009: 3102 等）。この事態実現受身構文は，対象が通常動詞に後続するという語順を除いて，非対格構文と形態統語上の区別がほとんどないと言え，非常に連続的である。

[15] 一般に受身構文と呼ばれるが，本稿では 3.1 の受身文の分類に照らして，これを事態実現受身と呼ぶ。なお，スペイン語では状態受身は，一時的状態を表すコピュラ動詞 estar と過去分詞の組み合わせによる構文によって表される。

5.5. E）非人称構文（Impersonal construction）

非人称構文は，上の事態実現受身が自動詞にまで拡張したもので，「誰がするか」ではなく「何が起きるか（起きたか）」という事態の実現・存在を前景化して述べつつも，常に不特定の動作主を含意する点で意味・機能的に上の事態実現受身と共通するが，構文の形式としては動詞と一致する文法項としての統語上の主語を欠く。

（36）　構文形式［se 自動詞 3 人称単数］se の人称数の変化なし

（37）　Ayer　**se habló**　de　política　en　la　facultad.

(Sánchez López 2002: 29)

yesterday se　speak.3SG.PAST of　politics　in　the　faculty

「昨日，学部でみんなは政治について話した」

5.6. se 中動態が可能の意味を持つとき

本節では, se 中動態が可能の意味を持つ場合について確認する。まず, 志波（2020）でも述べたが，可能の意味を構文として安定的に持つのは典型的な D）中間受身構文（middle-passive construction，potential-passive）である。

（38）　Este　auto **se estaciona**　fácilmente.

this　car　se　park.3SG.PRES　easily

「この車は簡単に駐車できる」

中間受身構文は事態実現受身と非対格構文が未完了時制（超時）で述べられるもので，（38）は完了時制で述べられれば事態実現受身となる。ただし，主語である対象が必ず主題となって動詞に先行し，難易を表す副詞句を典型的に伴う点では事態実現受身とも異なる。

この構文の意味は，尾上（1998b）の「動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性，萌芽がその状況の中に存在する」（尾上 1998b: 93）という可能の定義に合致している。すなわち,「簡単に，良く（～する）」といった意味の難易副詞の使用が，当該行為を実現しようとする「動作主の意図」を含意させ，かつ，未完了時制で主語＝主題である対象の特性（property）を述べる文であることが,「その行為が実現するだけの許容性，萌芽が対象の特性としてある」，と解釈される。これにより，安定的に可能の意味を持つのだと考えられる。

これに対し，Shibatani（1985）が出口（1982）から引用している，先の（4）は非人称構文であるが，5 節冒頭の F）の「se nace」や（37）のように，非人称構文自体が可能の意味を持つわけではない。（4）では,「ここから」という場所句が行為実現を許容し，さらに動作主の「駅に行く」ことの実現への意図・期待が含意され，可能の意味を帯びていると考えられる。また，次のように事態実現受身構文も，未完了時制（超時）で実現の許容性・条件となる句（ここでは時間節）を伴い，か

つ語用論的に動作主の事態実現への期待・意図が読み取れれば，可能の意味を持ちうる。

(39) Cuando el semáforo está verde, **se cruza** la calle.
when the signal be.3SG.PRES green se cross.3SG.PRES the street
信号が青の時に道を渡れる（道が渡られる）（志波 2020 より）

つまり，未完了時制（超時）の非人称構文や事態実現受身構文は，一文としては「人は一般にそうする（ものだ）」ということだけを述べているのだが，副詞句や先行談話によって動作主の意図・期待が想定され，さらに行為実現の許容性・条件と解釈される場所句や時間句などがあることで，限定的に場所可能や時間可能の意味を帯びるのだと考えられる。

5.7. se 中動態が自発の意味を持つとき

次に，se 中動態が自発の意味を持つ場合であるが，それは利害与格とも呼ばれる与格と共起する場合である [16]。ここでは，再帰接辞と動詞との間に与格の人名詞が入り，「（与格の）人に対してその人に意志がないのに当該事態が発生する」という，古代日本語の自発によく似た意味を表している。この構文はかなりの生産性があり 5.3 に挙げたほとんどの非対格動詞を用いることができる。

(40) **Se** me **rompió** el plato.
se 1SG.DAT break.3SG.PAST. the dish
「私は（うっかり）皿を割った（私に対して皿が割れた）」

この与格構文は，本来動詞が表す事態とは関係のない第三者をその事態の関与者として導入する。このとき，動詞の表す事態との関係で，与格の人が動作主と同一指示であると理解されると，自発（非意図）の解釈が生まれるものと考えられる [17]。この与格代名詞は，動詞が表す事態との関係で被害者（(41)）や受益者（(42)）と解釈されることもあり，日本語の間接受身構文や受益構文にも一部対応しているが，詳しい記述は今後の課題である（福嶌 1990，上田 2000 も参照）。

---

[16] この構文が古代日本語の自発に対応するのではないかというご指摘は東京外国語大学名誉教授の高垣敏博先生から頂いた。また，福嶌（1990）もスペイン語のこうした構文を間接影響文と呼び，「出来事の間接影響を受ける者が，実はその出来事の遂行者でもある場合」に，「過失，自発」の意味を持つことを指摘している（pp. 210–213）。

[17] こうした自発解釈の使用は，自然発生的変化を表す動詞（非対格）に典型的であり，事態実現受身のように動作主を介さずには起こり得ない事態を表す動詞との共起はあまり見られない。ただし，「olvidar 忘れる」という動詞は動作主を介さずには起こり得ない動詞で，この受身構文は「olvidarse 忘れられる」であるが，この構文は逆に与格代名詞と共起しない純粋な事態実現受身の使用がほぼなく，常に与格代名詞と共に用いられる。これは「olvidarse 忘れられる」が心理的な事態であることと関係しているだろう。

（41）　**Se** me **murió** el perro.　（Takagaki 2019: 104 参照）
se 1SG.DAT die.3SG.PAST the dog
「私は犬に死なれた（私に対して犬が死んだ）」

（42）　¿Me puedes echar esta carta al correo?
（長谷川 2007: 65(25)）
1SG.DAT can.2SG.PRES throw.INF this letter to-the mailbox
「この手紙を投函してくれる？」

6. 両言語のヴォイス体系の対照

本節では，以上概観した両言語の下位構文タイプを比較し，両言語の受身と可能，自発がどのような構文であるかを確認した上で，両言語の共通点と相違点をまとめる。

6.1. 両言語のヴォイスの共通点

古代日本語とスペイン語は，他動詞と対立する自然発生的自動詞の周辺に，「行為が主語の意志のもとに（外へ向かって）発生するのか否か」（柴谷 1997）といった意味に関わる文法カテゴリーとしてのヴォイスの体系を拡げている。そして，この体系の中で，「外的動作主の介在なしに変化が実現する」という意味の参与者が 1 の自然発生的変化の構文から，**本来外的動作主を介さずには起こり得ない事態を表す動詞，すなわち動作主必須動詞にまで「自然発生的捉え方」を拡張させている点で共通している**（動作主必須動詞とは，事態実現のために必ず動作主が意味的に必要な事態を表す動詞をいう）。この〔**動作主必須動詞＋自然発生**〕のスキーマ構造が，受身や可能と呼ばれる構文を生み出すのである。日本語では，語彙的な自然発生的変化の自動詞から直接に文法的接辞としての -(r)are- が取り出されたのに対し，スペイン語ではもともと〔se ＋他動詞〕という構造で再帰を表していた構文が自然発生的変化にまで意味を拡張し，さらに受身を拡張したという点では異なるものの，外的動作主を介さずには起こり得ない事態をも自然発生で捉える構文として，自然発生的変化から受身その他を拡張した点で共通しているのである。

6.2. 両言語のヴォイスにおける受身構文の相違点

古代日本語のラレル構文では，〔動作主必須動詞＋自然発生〕の構造に「有情者視点」という要素が加わり，「有情者＝私に対して他者の行為が自然発生する（私の意志と関係なく降りかかる）」という有情主語の受身が中心的に発達した。また非情物が主格に立つ（立ちうる）構文では，「有情者視点」で優先的に解釈されるため，自発・可能の解釈が優勢になり，非情主語受身の類型は限られていた（3.4 参照）。例えば，先の 4 節冒頭い－ 1 の自発の例のように，「扇が置かれる」という非情物対象のある文は，スペイン語では「（誰かによって）扇が置かれる」という事態実現の非情主語受身として発達したのに対し，日本語では「（相手の好意を思

うと思わず）扇が置かれる」という実現構文（自発）として発達したのだと考えられる。このため，古代語には，中立視点の事態実現受身はほとんど存在しなかった（志波 2018b）。非常に限られた類型の非情主語受身が存在したが，これらはラレル構文全体の使用から見ると，割合としてはきわめて少数である。参考までに，『源氏物語』における「桐壺」から「花宴」までの約 300 例の用例の割合を示す[18]。ラレル構文では，どの構文であるのか決めがたい例も少なくないため，この割合はあくまで目安でしかないが，個別・特定の有情者をめぐって，有情者の側から事態を述べる有情主語受身と実現，尊敬が，全体のおよそ 97% を占めていることは注目に値する。

表 1 「桐壺」から「花宴」までのラレル構文の下位構文タイプの割合（カッコ内は %）

有情主語受身	実現（自発・不可能）		尊敬[19]	主催	非情非情	状態	合計
97（32）	184（61）		13（4）	3（1）	1（0.3）	4（1.3）	302（100）
潜在的受影者のいる受身 4	自発 152 【否定 2】	不可能 32 【肯定 10】					

一方のスペイン語の se 中動態では，自然発生の捉え方が中立視点のまま動作主必須動詞にまで拡張し，「何らかの動作主によって事態が実現する（自然発生する）」（4.1 の実現構文の意味も参照）ことを述べる非情主語の事態実現受身を受身の中心的構文として発達させた。これに対し有情主語の場合は，主語に立つ有情者が外的動作主から行為を被るわけだが，その外的動作主と主語が同一指示であるという解釈が優先され（有情者主語＝外的動作主），再帰構文を確立したため，有情主語の受身はほとんど存在しない（5.1 参照）[20]。

6.3. 両言語のヴォイスにおける可能構文の相違点

先に 3.2 で確認した可能の分類をスペイン語の se 中動態における可能の意味を持つ文に当てはめると，未完了時制（超時）でのみ可能の意味を持つことから，すべて潜在系の可能であると言える。また，行為実現の許容性・条件を対象が持つもの（中間受身構文）と場所，時が持つ文（非人称構文，事態実現受身構文）がある

[18] 参考までに，各構文の外延は同じではないが，現代語における大雑把な割合を示しておく。小説の会話文 542 例中，受身用法（非情主語受身含む）が 394 例（72.7%），可能用法が 77 例（14.2%），自発用法が 5 例（0.9%），尊敬用法が 66 例（12.2%）であった。小説の地の文では 896 例中，受身用法が 790 例（88.2%），可能用法が 47 例（5.2%），自発用法が 56 例（6.3%），尊敬用法が 3 例（0.3%）であった（志波 2015）。

[19]「思さる」はすべて自発とした。

[20] 中動態で有情主語の受身は，先の注 11 の動詞の場合のほかに，「Se buscan secretarias.（秘書が探されている＝秘書求む）」のような，不定の人間職業名を表す名詞句が主語に立つ場合がある。しかし，この場合は意志や感情をもった人格的な特定の人ではなく，職業名詞であり，「私＝ 1 人称」が主語に立つような典型的な有情主語受身はやはり存在しない。

ことを見た。いずれも，動作主が行為実現の許容性を持つのではない，ということが重要であると考えられる。つまり，スペイン語の se 中動態における可能は，潜在系対象可能，場所可能，時間可能等であると言える。

一方の古代日本語の不可能構文は，動作主を取り巻く一時的な状況が要因となって行為が自然発生しないことを述べる構文が中心であった。これは，時間軸に個別一回的な出来事として位置づけられる，実現系状況可能であると言える。以上をまとめると次の通りである。

表 2　古代日本語（ラレル）とスペイン語（se 中動態）のヴォイス体系における受身と可能

	受身		可能	
	有情主語	非情主語	潜在系	実現系
古代日本語	中心的	わずかに状態受身等	ほぼなし（注 6 参照）	状況可能
スペイン語	ほぼなし※	中心的	制約のある対象可能等	なし

※「コピュラ + 過去分詞」による受身を除く（注 11 参照）。

6.4. 両言語のヴォイスにおける自発構文の相違点

5.7 では，スペイン語の se 中動態の主に非対格構文（自然発生的変化）が与格代名詞と共起することで自発の意味を表すことを述べた。この［与格代名詞 + 中動態（非対格）］という構文が表す意味は，古代日本語の自発構文が表す意味に非常によく似ている。両者の意味は「動作主に意志･意図がないのに自分の行為が発生する」という点で共通している。構造的にも自然発生的変化の形式を利用しながら動作主を主題や与格代名詞によって導入する点で共通している。このとき，スペイン語の［与格代名詞 + 中動態《与格の人 = 動作主》］では，「olvidarse 忘れられる，pasarse 見過ごされる」などの心理的な事態を表す動作主必須動詞の他，「romperse 割れる，arrugarse しわになる，caerse 落ちる」などの自然発生的変化を表す非対格動詞がこの自発構文に頻繁に用いられる。こうした非対格動詞で構成されるスペイン語の自発は，「与格の人に対して自然発生的変化が起こる（降りかかる）」ということを述べることに焦点があり，与格の人自身の行為であるという点は積極的に語らない。

一方，古代日本語の自発に用いられる動詞は，人が行為者である心理動詞がほとんどで，自然発生的な自動詞（非対格動詞）は次のような「手がうちわななく」の例があるが，主語は有情者の身体部位である。古代日本語の自発は，動作主必須動詞を用いて，「自分の行為が自分に意志がないのに自然に発生する」という意味を積極的に表していると考えられる [21]。

[21] 北海道などに見られるラサル（-(r)asa-）は，「有情者に対して自然発生する」という意味での広義の自発用法を非常に生産的に発達させている。「ドを弾こうとしたら，レが弾かさった」（円山 2016: 245）のような動作動詞の自発に加え，すでに自然発生的な変化を表す自動詞にも「お湯が沸かさったよ」（円山 2016: 262）のような，勝手に実現したことを強調する用法がある。このラサルは，自発を強く発達させている反面，可能用法にはやや制約があり，また受身を表せないという特徴がある。ただし，本研究で状態受身とした古代日本語に存在した非情主語受身のタイプは表せるようである。ラサルのこうした用法（下位構文）のあり方は，

(43)「生けるかひなきや、誰が言はましごとにか、うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる命よ　はかなしや」と、御手もうちわななかるるに、乱れ書きたまへるいとうつくしげなり。（源氏・夕顔）
（「生きている甲斐がないとは、誰の言いたい言葉でしょう。空蝉のようにはかないあなたとの仲はつらいものととっくにわかっていたのに、お便りをいただくと、またその言葉にすがって生きていたい気になります。なんと頼りないことか」と、御筆づかいも手がつい震えるので、乱れ書きになさっているのがひとしおおみごとである。）

こうした相違はあるものの，自然発生的変化の意味・形式に動作主である人を主題や与格代名詞といった手段で導入し，自発を表すという共通点は興味深い。

6.5. 動作主と対象の有情・非情の別と各構文タイプの位置づけ

最後に，主語（主格）に立つ対象の有情・非情の別と，当該事態に外的動作主が必須か否かに関連させて，各構文がどのように位置づけられるかを比較してみたい。

まず，非情対象が主格に立つ（立ちうる）とき，スペイン語では外的動作主の含意がない場合は自然発生的変化を表す非対格構文（(30)（31)）がここに位置づけられる。そして，これが，中立視点で外的動作主がいなければ起こり得ない動作主必須動詞にまで拡張したのが事態実現受身構文（(33)（34)）であった。さらに，この事態実現に注目して捉える述べ方が自動詞にまで拡張して非人称構文（(4)(37)）が発達している。そして，制約の強い形で可能の意味を持つ中間受身構文（未完了時制の事態実現受身，(38)）がある。

これに対し古代日本語は，外的動作主の含意がないところには語彙的な自然発生的自動詞構文（「荒る」「暮る」等）が位置し，ここから派生した外的動作主を必ず含意するラレル構文は，動作主視点で実現構文（自発・不可能）を確立している。そして，数が劣勢な構文として状態受身構文（と非情非情受身構文）が中立視点の構文として存在する。

一方，動作主と対象がいずれも有情者で外的動作主の含意があるとき，スペイン語では動作主とは別の実体として対象である自分が把握される再帰構文（21b）がここに位置づけられる。これに対し，古代日本語では，ここに有情主語受身構文を発達させている。

なお，図 3 を見ると，実現構文（自発・可能）と事態実現受身構文は，領域を同じくする構文であることがわかる。両構文は，典型的に非情物の対象を主格に立てる点で共通しているのである[22]。現代日本語では，この領域に，先の（9）と（10）

ヴォイス体系の拡がりを考える上でのヒントを与えてくれる。

[22] そして，潜在的受影者のいる受身と呼ばれる「大和魂の世に用ゐらるる方（政治家としての力量が世間に重んじられること）」などの受身で，本研究で有情主語受身の一種とした構文もこの領域に当てはまるものである。

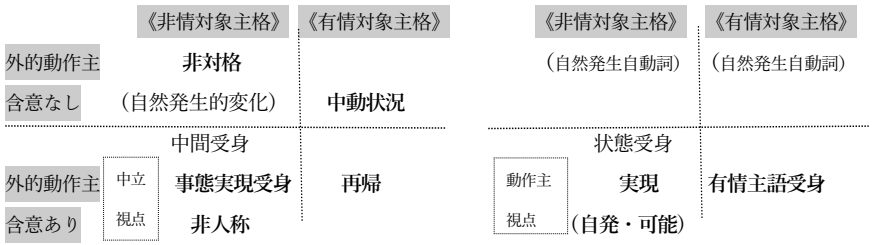

図 3　スペイン語（左）と古代日本語（右）のヴォイス体系（志波 2018b を改変）

の「止められた，捨てられた」や「この魚は生で食べられる」のような，事態実現受身と可能の両解釈がほぼ同一の構文形式の中で共存している。だが，近世に可能は五段動詞において新たな接辞 -e- を獲得してラレル構文から次第に撤退し，さらにその過程は一段動詞において「ら抜き」と呼ばれる現象で現在も進行している（「止めれた，捨てれた」等）。つまり，近代に欧文翻訳の影響で非情主語の事態実現受身がラレル構文に進出していき，それに伴って可能は別の接辞へと追いやられ（青木 2018），現代日本語のラレル構文は受身専用の構文に移行しつつある。

7. まとめと今後の課題

本研究では，古代日本語とスペイン語が，「行為が主語の意志のもとに外へ向けて発生するのか否か」という意味対立を文法的カテゴリーとして表しながら，外的動作主を含意しない自然発生的変化から動作主を含意する動作主必須動詞に構文を拡張し，受身や可能を意味する構文を持つ点では共通することを指摘した。またスペイン語の中動態も与格代名詞と組み合わさることで，古代日本語によく似た自発の意味を表すことを見た。一方，受身と可能の内実（下位構文）はまったく異なっていた。両言語の受身を含むヴォイス体系は，自然発生的変化の領域を共有しながら，そこから一面では共通しながらも本質的に異なる構文を発達させている。これは，古代日本語のラレル構文が話し手の「視点」と強く結びついた構文であったためであると主張した。

今後は，古代日本語からどのように日本語のラレル構文の体系が変化していったのかについて，本稿で扱えなかった主催構文，尊敬構文も含め，記述したいと考えている。また，本稿でわずかな指摘にとどまったスペイン語の利害与格構文及び「コピュラ＋過去分詞」の受身文も含め，ヴォイスに関わる様々な形式を総合的に対照していきたい。

【略語】

ACC= 対格，DAT= 与格，INF= 不定形，PAST= 過去，PL= 複数，PRES= 現在，SG= 単数

【用例出典】

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（小学館『新編日本古典文学全集』）

参照文献

青木博史（2018）「可能表現における助動詞「る」と可能動詞の競合について」岡﨑他（編）197–214.

上田博人（2000）「日本語の授与補助動詞とスペイン語の与格接語」『日本語と外国語との対照研究 VI. 日本語とスペイン語（3）』123–186. 東京：くろしお出版.

大矢俊明（2008）『ドイツ語再帰構文の対照言語学的研究』東京：ひつじ書房.

岡﨑友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）（2018）『バリエーションの中の日本語史』東京：くろしお出版.

岡部嘉幸（2018）「「非情の受身」のバリエーション―近代以前の和文資料における―」岡﨑他（編）159–173.

荻野千砂子（2007）「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』3-3: 1–16.

奥田靖雄（1986）「現実・可能・必然（上）」言語学研究会（編）『ことばの科学 1』181–212. 東京：むぎ書房.

尾上圭介（1998a）「文法を考える 5　出来文（1）」『日本語学』17-7: 76–83.

尾上圭介（1998b）「文法を考える 6　出来文（2）」『日本語学』17-10: 90–97.

尾上圭介（1999）「文法を考える 7　出来文（3）」『日本語学』18-1: 86–93.

尾上圭介（2002）「コトの出来する場としての自己」文法学研究会　第 4 回集中講義資料（8 月 3・4 日，於：東京大学）.

尾上圭介（2003）「ラレル文の多義性と主語」『月刊言語』32-4: 34–41.

川村大（2012）『ラル形述語文の研究』東京：くろしお出版.

金水敏（1991）「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164: 1–14.

釘貫亨（1991）「助動詞「る・らる」「す・さす」成立の歴史的条件について」『国語学』164: 15–28.

古賀悠一郎（2018）『現代日本語の視点の研究―体系化と精緻化』東京：ひつじ書房.

志波彩子（2005）「2 つの受身―被動者主役化と脱他動化―」『日本語文法』5-2: 196–212.

志波彩子（2014）「日本語とスペイン語の 1 人称主語受身文―会話文テクストにおける」日本言語学会第 149 回大会口頭発表．愛媛大学，2014 年 11 月 15 日.

志波彩子（2015）『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』大阪：和泉書院 .

志波彩子（2018a）「受身と可能の交渉」『名古屋大学人文学研究論集』1: 305–323.

志波彩子（2018b）「ラル構文によるヴォイス体系―非情の受身の類型が限られていた理由をめぐって」岡﨑他（編）175–195.

志波彩子（2020）「スペイン語の se 中動態（再帰構文）における可能の意味」『名古屋大学人文学研究論集』3: 175–195.

柴谷方良（1997）「言語の機能と構造と類型」『言語研究』112: 1–31.

柴谷方良（2000）「ヴォイス」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語の文法 I　文の骨格』119–186. 東京：岩波書店.

渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1): i-262.

出口厚実（1982）「スペイン語―再帰形式をめぐって―」森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明（編）『講座日本語学 10　外国語との対照 I』305–318. 東京：明治書院.

出口厚実（1997）『スペイン語学入門』東京：大学書林.

寺﨑英樹（2011）『スペイン語史』東京：大学書林.

橋本進吉（1931）「受身可能の助動詞」（講義案・高橋一夫氏筆記「助動詞の研究」第三章. 『橋本進吉博士著作集 第八冊 助詞・助動詞の研究』東京：岩波書店 1969 収録）.

長谷川哲子（2007）「授受表現における日本語とスペイン語の対応」『大阪産業大学論集　人文科学編』121: 55–78.

林田理恵（2013）「ロシア語の受け身が描く世界：再帰動詞による受動態とは」『言語文化研究』39: 75–93.

春木仁孝（2002）「フランス語の再帰構文　その認知的一体性」西村義樹（編）『認知言語学 I:

事象構造』37–62. 東京：東京大学出版会.
福嶌教隆（1990）「スペイン語と日本語―間接影響表現の対照―」宮地裕他（編）『講座日本語と日本語教育 12　言語学要説（下）』197–218. 東京：明治書院.
藤田健（2010）『ロマンス語再帰代名詞の研究：クリティックとしての統語的特性』北海道：北海道大学出版会.
円山拓子（2016）『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』東京：ひつじ書房.
山口和彦（2010）「可能構文の文法範疇について」札幌医科大学『医療人育成センター紀要』1: 43–54.
山口響史（2018）「近世を中心とした受身文の歴史―非当事者の受身の発達とその位置づけ―」『日本語文法』18-2: 93–109.
吉田永弘（2013）「「る・らる」における肯定可能の展開」『日本語の研究』9-4: 18–32.
吉田永弘（2019）『転換する日本文法』大阪：和泉書院.
Allan, Rutger J. (2003) *The middle voice in Ancient Greek: A study of polysemy*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
Alarcos Llorach, Emilio (1968) Valores de *se* en español. *Archivuum 18* (cited in *Estudios de gramática funcional del español*: 213–222. Madrid: Editorial Gredos).
Barber, Elizabeth. J. W. (1975) Voice—Beyond the passive. *BLS. Proceedings* 1: 16–24.
Benveniste, Émile (1966) *Problèmes de linguistique générale*. Paris: Gallimard.（岸本通夫訳 1983『一般言語学の諸問題』みすず書房）.
Croft, William (1994) Voice: Beyond control and affectedness. In: Barbara Fox and Paul J. Hopper (eds.) *Voice: Form and function*, 89–117. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
Fernández-Montraveta, Ana y Glòria Vázquez (2017) *Las construcciones con* se *en español* (*Cuadernos de lengua española* 130). Madrid: Arco Libros.
Frajzyngier, Zygmunt and Traci S. Curl (eds.) (2000) *Reflexives: Forms and functions*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
Gili Gaya, Samuel (1961) *Curso superior de sintaxis española*. Barcelona: Spes.
Haiman, John (1983) Iconic and economic motivation. *Language* 59: 781–819.
Haspelmath, Martin (2003) The geometry of grammatical meaning: Semantic maps and cross-linguistic comparison. In: Michael Tomasello (ed.) *The new psychology of language: Cognitive and functional approaches to language structure vol.2*, 211–242. Mahwah, New Jersey & London: Lawrence Erlbaum Associates.
Jiménez Juliá, Tomás (2015) En torno a la voz media en español. In: *Studium Grammaticae: Homenaje al profesor José A. Martínez*, 489–507. Oviedo: Universidad de Oviedo.
Keenan, Edward L. (1985) Passive in the world's languages. In: Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description, vol. 1: Clause structure*, 242–281. Cambridge: CUP.
Kemmer, Suzanne (1993) *The middle voice* (*Typological studies in language 23*). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
Mendikoetxea, Amaya (1999) Construcciones con "se": Medias, pasivas e impersonales. In: Ignacio Bosque and Violeta Demonte (eds.) *Gramática descriptiva de la lengua española Vol. 2*, 1575–1630. Madrid: Real Academia Española/Espasa-Calpe.
Monge, Félix (2002) Las frases pronominales sentido impersonal en español. In: Cristina Sánchez López (ed.) (2002), 341–391.
Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española（略称 RAE-ASALE）(2009) *Nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Real Academia Española/ Espasa-Calpe.
Sánchez López, Cristina (ed.) (2002) *Las construcciones con* se. Madrid: Visor Libros.
Sánchez López, Cristina (2002) Las construcciones con *se*: Estado de la cuestión. In: Cristina Sánchez López (ed.) (2002), 13–163.
Shibatani, Masayoshi (1985) Passive and related constructions: A prototype analysis. *Language* 61(4): 821–848.
Takagaki, Toshihiro (2019) Las pasivas del español y el japonés. In: Toshihiro Takagaki (ed.) *Exploraciones de la lingüística contrastiva español-japonés*, 93–109. Madrid: UAM Ediciones.
Velten, H.V. (1931) On the origin of the categories of voice and aspect. *Language* 7: 229–241.

執筆者連絡先：
〒 464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院・人文学研究科
e-mail: a-shiba@nagoya-u.jp

［受領日　2018 年 12 月 31 日
最終原稿受理日　2020 年 9 月 18 日］

Abstract

Contrastive Study of Passive, Potential and Related Constructions in the Voice System: Early Middle Japanese and Contemporary Spanish

Ayako Shiba
Nagoya University

A common feature can be found in the voice system of Early Middle Japanese (EMJ) and Contemporary Spanish (the middle voice with *se* constructions). Both languages developed the passive and the potential constructions from the spontaneous (unaccusative) construction that expresses that a change occurs without an agent. They extend this spontaneous construal to the "agent-essential" verbs that express an event that requires the action of an agent.
There is also a difference between the two languages, however. EMJ extended the spontaneous construal with the speaker's point of view and mainly developed the animate-subject passive and the realization construction, which is called the non-volitional or potential use in previous studies. Uses of inanimate-subject passives were not as common in EMJ as they are in contemporary European languages, because it developed the realization construction where the inanimate-subject passives would be used in European languages.
In contrast, Spanish extended the spontaneous construal to the "agent-essential" verbs in a neutral point of view and mainly developed the inanimate-subject passive and impersonal constructions. In a very limited condition, the Spanish middle voice has a potential meaning. Furthermore there are seldom animate-subject passives because it has a reflexive construction in the range where the EMJ developed animate-subject passives.